

# 営農情報

第109号平成23年7月28日発行

(イチゴ)

J A 福岡大城  
南筑後普及指導センター

6月中旬は平年に比べ日照不足が続き、雨も多かったことから、鉢上げの遅れたところでは活着不良を起こした苗が多くみられました。鉢上げ後1か月余り経過した現在でも、その影響により根張りが悪く、輪斑病などがみられるようです。

今年度は親株の炭そ病潜在感染率が高いこと、ランナー増殖期（5月下旬）に雨が多かったことから、炭そ病への感染リスクが高い状況にあります。“汚斑”や“葉柄部の折れ”症状が発生している苗床も散見されています。疑わしい株は除去か別管理とし、定期的な薬剤散布を行ってください。窒素過多は炭そ病の蔓延につながります。苗の生育が遅れていても多肥管理にせず、適切な肥培管理を行う必要があります。

「炭そ病」が発生した場合や、生育が遅れクラウンが充実していない場合は、作型を遅くするなど、苗の状況に応じた作型の選択が必要です。

## 作型及び苗の管理

### 作型の選択

- 低温処理作型と普通ポットとの組み合わせで、2～4作型を作付ける。  
厳寒期の出荷増と春期の収穫ピークを軽減するため、栽培面積が大きくなるほど多くの作型を作付けする（9月10日～9月下旬の定植で作型を分散する）。
- クラウン径が8mm未満の苗は、株冷・夜冷処理しない。

表1 「あまおう」の作型別、処理期間と定植日及び収穫開始の目安

作型 (利用)	入庫	出庫	定植日	陽光 処理	収穫開始見込
株冷Ⅲ型	8月18日	9月10日	9月10～14日	3回	11月中旬
株冷Ⅳ型	8月23日	9月15日	9月15～18日	2回	11月中～下旬
株冷Ⅴ型	9月1日	9月19日	9月19～20日	1回	11月下旬
J A共同株冷	8月29日頃	9月17日頃	9月16～19日	2回	11月下旬
夜冷Ⅲ型	8月18日	9月10日	9月11～14日		11月中旬
夜冷Ⅳ型	8月23日	9月15日	9月15～18日		11月中～下旬
普通ポット1・2			9月20～25日		12月上旬
普通ポット3			9月26～28日		12月中旬
普通ポット4(厳寒期安定出荷)			9月29日～		12月下旬

## 肥培管理

クラウン径8mm以上の良苗を育苗目標とし、過剰な施肥をしない。

- ① 生育が遅れている場合は、苗の充実を優先し、遅い作型へ変更する。
- ② 根傷みが生じている場合は追肥を控え、根が回復するまで葉面散布で対応する。
- ③ 各作型に応じて最終追肥時期（表2）を決め、計画的な施肥を行う。

表2 最終追肥時期の目安

作 型	3.5寸鉢	3寸鉢
株冷Ⅲ型（8月18日入庫）	8月 1日	8月 7日
J A株冷Ⅳ型（8月27日頃入庫）	8月 9日	8月12日
夜冷（8月中下旬処理開始）	処理10日前	処理 5日前
普通ポット・2回目低温処理	8月20日	8月25日
普通ポット（9月末以降定植作型）	8月25日	8月30日

## かん水

- ① かん水が多いと「炭そ病」の感染機会が多くなるので、鉢土の乾燥程度（根の状態）を常に観察して、過湿にならないようなかん水を行う。
- ② 朝主体のかん水とし、夕方には鉢土表面が乾く程度とする（炭そ病対策）。
- ③ 寒冷紗を展張している場合は、ポットの乾き具合を観察し、被覆しない場合よりかん水を控える。

## 摘葉及び徒長防止

下葉除去後の傷口から「炭そ病」菌の侵入が想定される。

降雨時・直前には下葉の除去作業は絶対に行わない。また、下葉の除去直後（当日～翌日）は、「炭そ病」「ダニ」の防除を徹底する。（傷口が雨にあう前に防除を行う）

- ① 摘葉は、3～3.5枚を維持するようにする。
- ② 1回当たりの摘葉数は2枚以内とし、生育が悪い時や雨天時には摘葉をしない。1回の下葉の除去作業は、短時間で終了する。（ひと回りする期間を短く）
- ③ 最終摘葉時期は表3に準じ、3.5枚程度に摘葉する。
- ④ 株冷入庫直前（コンテナ詰め時）の摘葉は絶対に行わない。

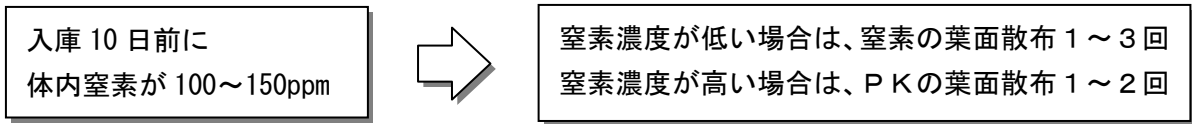
表3 作型別最終摘葉時期

株 冷	入庫 10 日前
夜 冷	入庫前
普通ポット	8月20日頃

# 花芽分化促進

## 【株冷処理】

- 株冷入庫時に、体内窒素を25～50ppmにするため、計画的な施肥・摘葉を行う。
- 入庫前に「炭そ病」「ダニ」の防除を徹底し、入庫直前の摘葉は行わない。



## 【株冷処理の体内窒素濃度による管理】

### ◎冷蔵庫入庫 10 日前の体内窒素濃度が低すぎる場合

体内窒素濃度	対策
25～50ppm	葉面散布 1回：OKF-1 1000倍、メリット青 500倍など
25ppm 以下	葉面散布 2～3回：OKF-1 1000倍、メリット青 500倍など

### ◎冷蔵庫入庫 10 日前の体内窒素濃度が高すぎる場合

体内窒素濃度	対策
150～250ppm	葉面散布剤 1～2回：メリット赤 500倍など <b>5 日前に 100ppm 以下になっているか再調査</b>
250ppm 以上	遅く定植する作型に変える

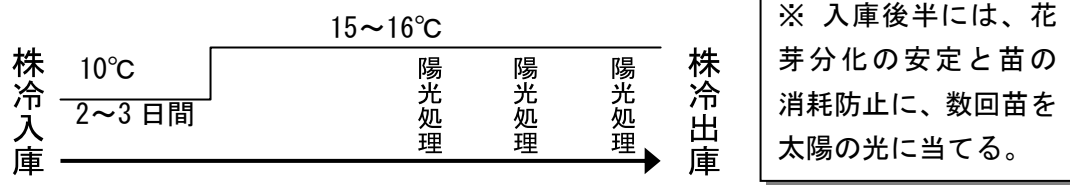


図 1 株冷入庫期間の温度管理

## 【夜冷処理】

- 夜冷処理は、処理期間中に肥料切れを生じないように、処理開始時には適当な濃度（試験紙判定で150ppm程度）の体内窒素を確保する。
- 入庫時の温度：13℃±2℃、入出庫の時間：午後6時入庫～午前10時出庫で管理する。  
※早く閉め込むとポットの温度が高いため、庫内の温度が上昇し、温度が下がるまでに時間を要する。また、蒸れにより「炭そ病」の発生を助長する。

## 【普通ポット】

- 8月下旬より寒冷紗被覆を行うと、花芽分化の促進と揃いが期待できる。

# 定植床の準備

定植床準備は、8月中旬までに終了しておく。

## 土壌消毒

- 前年度に、「炭そ病」、「ネグサレセンチュウ」などの病害虫が発生していた場合は、薬剤による土壌消毒を行う。

## 基肥施用

- 「あまおう」の早期作型では、2番果房の花芽分化安定対策として、「活着後～生育初期」の肥効を抑える目的に、早い時期の定植ほど基肥量を減らす。

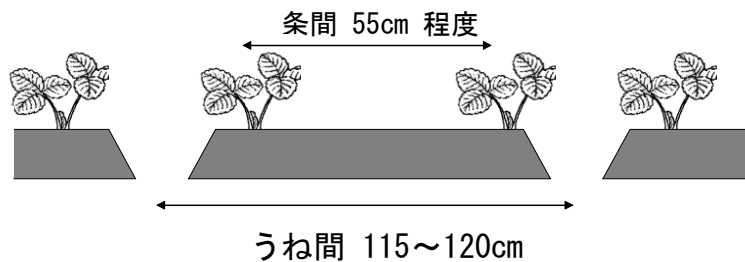
表4 作型別基肥施用量

作型	肥料名	施用量	N	P	K
早期作型 (9月18日以前定植)	新生いちご	140kg/10 a	8.4	8.4	5.6
普通ポット等 (9月19日以降定植)	新生いちご	200 kg/10 a	12	12	8
普通ポット等 (9月29日以降定植)	新生いちご	300 kg/10 a	18	18	12

※ マルチ前の追肥は、2番果房の分化安定を考慮し、10月上旬の生育に応じて、「新生いちご」を0～80 kg/10 a 施用する。

## うね作り

- うね作りは、下図のように行う。うね作り後は、定植までビニルのベタがけを行う。  
株間 25cm (10月定植作型は 20～23cm)



# 病害虫防除等

## 炭そ病

- 育苗期間中は定期的な防除を行う（防除例参照）。特に、摘葉前後の防除を徹底する。
- 発生株、葉に病斑を確認した株は早めに除去する。その周辺株も除去する。
- 株冷の陽光処理や夜冷の日光処理中に夕立などの降雨があった場合は、葉の水滴がなくなるまで入庫しない。株冷の場合、翌日の早朝に入庫する。

## ヨトウムシ類

- 芯葉を食害するため、芯葉に薬液がかかるように散布する。入庫中に食害を受ける事例が例年発生している。入庫前に防除を行う。